

迫られる軍楽隊改革とブラスバンド運動

上 宮 真 紀

1. はじめに

19世紀前半から20世紀初頭にかけてのイギリス社会で、ブラスバンドは労働者の娯楽として一大ブームを巻き起こした。そのブーム全盛期の1890年代前後には、イギリス各地におよそ30,000～40,000もの団体が存在すると記録され、¹ とりわけイングランド北部の工業地帯は「どんな小さな村でも、村にひとつはブラスバンド団体がある」² と描写されたほどである。人びとがブラスバンドに熱狂し、バンドの結成が相次ぐという一種の社会現象は、当時から「ブラスバンド運動」とよばれていた。³

この運動の進展は、コンテストの存在とその拡大を抜きにして語ることはできない。1853年、マンチェスターのベルヴュー動物園で開催された初のコンテスト以降、ハルやシェフィールドといったイングランド北部諸都市ではもちろん、ロンドンやエディンバラ、グラスゴーなどでも、ベルヴューを模したコンテストが続々と開催されるようになっていった。⁴ 1904年11月、専門誌『ブラスバンド・ニュース』に掲載された「ベルヴュー回想録」に明らかのように、「ベルヴューの記憶」とは、文字通り、コンテストの記憶でもあった。⁵

コンテストという場を成立させるには、審査員が必要不可欠である。しかしながら、奇妙なことに、従来の研究において、彼らの存在にはほとんど関心が寄せられてこなかった。それは『帝国主義と音楽』（2001年）を書いた歴史家 J・リチャーズはじめ、研究者の多くが、もっぱらコンテストに参加する団体、演奏する楽曲、楽器編成、またはコンテストの結果を研究対象として重きを置いていたことによると思われる。⁶

しかしながら、実際にコンテストに参加した経験をもつ人びとは、彼ら審査員の存在を等閑視してはいなかった。先にも紹介したが、『ブラスバンド・ニュース』（1904年11月）の特集「ベルヴュー回想録」では、揺籃期にあった過去のベルヴュー・コンテストについて、当時実際に参加していた

人びとの証言を半年間にわたって連載しているが、そこには審査員のすがたを記憶に刻み込んだ記述を数多く認めることができるのである。「1853年のコンテストを審査したのはワースリー出身の J・エルウッド(Ellwood)」、「1873～82年の審査員は、C・ゴドフリ(Godfrey)、J・オークデン(Oakden)、H・ミラーズ(Millers)……」、あるいは、1867年のコンテストの「審査員のなかには、かの有名なグラッドニー(Gladney)の父君がいた」などは、そのほんの一例である。⁷

コンテストの勝敗を決めるにあたり、決定的に重要な役割を果たした審査員とはいったい何者なのだろう。コンテストを報道した当時の新聞記事には、彼らの正体が明記されている。1853年、第一回ベルヴュー・コンテストの内容を伝えた地元紙『マンチェスター・ガーディアン』によれば、栄えある第一回目のコンテスト審査員を務めたのは、王室第一竜騎兵連隊軍楽隊長ジョン・オークデン、エルズミア伯付きの軍楽隊長ジョン・エルウッド、ならびに第八一連隊の元軍楽隊長ダウリング(Dowling)の3名である。⁸ 翌1854年、第二回ベルヴュー・コンテストには、前回同様オークデンに加えて、チェシア・ヨーマンリ義勇騎士団軍楽隊長 C・ライト(Wright)、第三竜騎兵連隊で軍楽隊を率いたブロサング(Brosang)という人物が審査員となった。⁹ 『プラスバンド・ニュース』の「ベルヴュー回想録」に登場したグラッドニーの父親(1867年審査員)は第三十イースト・ランカシア連隊の軍楽隊長であった。¹⁰ マンチェスターを離れ、1860年、ロンドンのクリスタルパレスで初めて開催されたコンテストには、王室砲兵隊軍楽隊長 J・スマイス(Smythe)、近衛歩兵第一連隊 D・ゴドフリ(Godfrey)、近衛騎兵隊軍楽隊長 C・ブーゼ(Boosé)などが審査を務めた。¹¹ すなわち、コンテストの審査を務めたのは、その肩書きが示すように、軍楽隊員、つまり軍隊関係者だったのである。従来の研究では、プラスバンド運動は、労働者を飲酒から切り離そうとする「理にかなった娯楽運動」のひとつとして、工場経営者や社会改良家たちとの関連が強調されてきた。¹² しかしながら、ひとたびプラスバンドを結成し、コンテストに参加すれば、もはや彼らの音楽を審査するのは、工場経営者や社会改良家ではなく、一見、労働者の平和な日常とは無関係のように思われる軍隊とかかわりをもつ人たちだったのである。

さらに注目すべきことは、ちょうど初のベルヴュー・コンテストが開催されたころから、審査員を務める彼ら自身の周辺で「音楽と軍隊の関係」が大きく変化しつつあったという事実である。その変化とはどのようなものだったのか。そして、この変化とブラスバンド運動の展開とはどのように結びついていたのだろうか。本論考ではこの問題を考えていきたい。

2. クリミア戦争の衝撃

ベルヴュー・ブラスバンド・コンテストが初めて開催された1853年とは、クリミア戦争が勃発した年でもある。開戦の発端は、東地中海への南下政策を模索するロシアがエルサレム聖地管理権をめぐるトルコ領内のギリシア正教徒保護を口実に、1853年7月、トルコに宣戦布告したことにあった。イギリスはロシアの南下を阻止するため、そして、「インドへの道」として地中海域を確保するため、翌1854年3月、フランスとともに参戦する。そして、これによって結果的にイギリスは、自国の軍事機構の欠陥や非効率性、あるいは医療衛生に対する問題意識の欠落を表面化させてしまうことになった。とりわけ、イギリス軍の戦死者のうち、その過半数が戦闘そのものよりもコレラなど疫病の蔓延による病死者であったなかで、野戦病院にて兵士たちの衛生や医療問題に尽力したフローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の活動はよく知られているとおりである。

クリミア戦争に参戦したこと、そしてこの戦争で初めて全国紙の従軍記者を戦地に派遣したことによって、これまでイギリスの軍隊に隠されてきたある事実がイギリス全土に暴露されることになった。1854年10月28日、『タイムズ』の記者ウィリアム・H・ラッセル(William Howard Russell, 1820-1907)は、次のように書いている。

.....わが [イギリス軍の] 野営の静寂さと陰気さは、にぎわしく活気あふれたフランス軍とはあまりにも違いすぎる。イギリス軍の周辺には、ドラムやラッパの音も、あるいは音楽らしい音もいっさい聞こえない。その一方、となり [フランス軍キャンプ地] では、途絶えることなくドラムや華々しいファンファーレの音が響き、軍楽隊の見事な演奏のおか

げで、夜ごとに心が和らぐ。わがイギリス軍の楽器の多くは倉庫に保管されたまま崩壊状態で統制もとれていない……イギリス軍には音楽が欠如している……軍隊に携わるものはみな、楽隊の音楽がいかに活気づかせるのか、よく分かっているのに。¹³

ラッセルが描き出したイギリス軍の駐屯地での様子は、すぐとなりに駐留する同盟国フランス軍が音楽によって心身ともに癒される様とはひどく異なっていた。イギリス軍の周辺には「音楽そのもの」が見当たらないのだ。さらにラッセルの記述はつづく。

次への移動中、[イギリス軍の]男たちが列を離れ、[別の]第七七連隊の方へとふらふらと行ってしまった。あそこには優秀な楽隊があるからだ。……男たちが長きにわたり疲弊しながら敵地を進軍していくそのあいだ、軍楽隊は、彼らを鼓舞激励せねばならない。……となり[のフランス軍]の司令部に活気があるのは、彼らのすぐ身近なところに素晴らしい音楽があるからなのだ。¹⁴

これが紙面上に掲載される8日前にも、ラッセルは別の記事のなかで、フランス軍を例に、軍楽隊が与える音楽効果について書き綴っていた。

……夜が明けるとすぐに、フランス軍は、丘の頂上にトランペットやドラムを集めさせた。[トランペットの]荒々しく華やかに鳴りわたる音、さらには[ドラムの]轟く音が幾度となく繰り返されるが、その音は歩兵連隊のラッパの鳴り響く音でかき消されてしまう……生気に満ち溢れた壮快でぞくぞくしてしまうような音楽だった。夜が明けたばかりの薄暗い朝、溪谷を包み込んだこの[意気揚揚とした]音楽がもたらす効果は忘れられなどしない……¹⁵

そこには、夜ごとに軍楽隊の音楽を楽しみ、そして夜が明けるとまた音楽を耳にしながら戦闘準備にとりかかる、活気あふれるフランス軍のすがたがあった。兵士のみならず、ただの一記者にすぎないラッセルでさえ感

化されてしまうような音楽が作り出されていたのである。そして、その心高ぶる音楽を忘れることができなかつたからこそ、先述した10月28日付の記事を本国へと書き送ったのだろう。

ラッセルが綴った記録のなかには、そのほかにも軍楽隊についての描写が数多く認められるが、ここではもうひとつ、1855年4月26日付の記事に掲載されたトルコ軍の軍楽隊にかんする文章を紹介するにとどめよう。

トルコ軍には質の良い軍楽隊をそなえた連隊がある。彼らは進軍する際、歩調を速めるようなテンポの音楽を鳴らして、[その様子を]見物している[民間]人たちに危険を知らせているのだ。その演奏ぶりはすばらしい……¹⁶

新聞報道をつうじて、戦地の軍楽隊について本国イギリスに伝えたのはラッセルだけではない。彼のほかにも『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』の通信員が書き送った記事のなかに、「フランス軍の野営で演奏する楽隊」と題する次のような一節が含まれていた。

フランス軍は、イギリス軍よりもすべてにおいて優越しているとして、彼らが軍楽隊の維持に注意を払っている点を見つけた。イギリス軍の野営について言及すれば、数ヶ月とは言わないまでも何週間ものあいだ、鼓舞させる軍楽で男たちの心を活気づけようとしたことなどない。その一方、となりの陽気なフランス軍においては、楽隊が定期的に練習をしており、兵士たちへの効果は抜群だ……イギリス兵は、……[宿営と]バラクラヴァを往復する道すがら、とりわけ楽隊が音楽を演奏していると立ち止まって[聴いてしまう]……[そして]演奏が止むとまた動き出すのだ。¹⁷

このように、従軍記者の筆によって、軍楽隊が「軍楽隊」として十分に機能し、音楽を取り入れることで兵士をうまく鼓舞させることができるフランス軍やトルコ軍、そして、それとは正反対に、まったく統制のとれていない崩壊状態の軍楽隊をかかえるイギリス軍の現実があばかれたのであ

る。もっといえば、彼らは軍隊の戦いぶりはさておき、戦地での音楽を問題視し、イギリスの軍楽隊、つまりブラスバンド・コンテストの場ではコンテストたるゆえに重要なポジションとして労働者の音楽を審査していた彼ら自身の音楽が実はいかに機能せず、破綻しているのかを暴露し、批判したのであった。

重要なことは、クリミア戦争において、フランス、トルコ両軍との「差」、つまりイギリス軍楽隊の欠陥点をとくと認識したのが、ラッセルはじめ、従軍記者たちだけではなかったことである。クリミア戦争の総司令官であったラグラン卿に伴って戦地入りしたヴィクトリア女王の従兄、ケンブリッジ公(George William Frederick Charles, 1819-1904)もそのひとりであった。彼は、戦地に到着した直後、イギリス軍楽隊の現状に策を講ぜねばならないと悟ったのである。¹⁸ いったい彼は何を目撃したのだろうか。

3. ケンブリッジ公の決断

クリミア戦争ではインケルマンおよびアルマの戦いにて、近衛師団とハイランド連隊兵団で構成される第一師団を率いて果敢に激戦を繰り広げたケンブリッジ公は、当時、第六三歩兵連隊のある軍曹に「あれほど軍隊から愛された人物はいない」¹⁹ と言わしめた中將であった。彼自身もまた軍隊を愛して、軍隊における変化を厭い、とりわけ後年には、この戦争経験を基盤に陸相エドワード・カードウェル(Edward Cardwell, 1813-86)が押し進めた1871年の軍制改革、あるいはボーア戦争期に導入を余儀なくされたカーキ色への軍服変更に真っ向から反発した。²⁰ この彼こそが、イギリス軍楽隊に対する批判の急先鋒だった。

1854年5月、保守的で軍隊における革新を嫌悪するケンブリッジ公にさえ改革の必要性を痛感させる重大な事件が発生した。それが、スクタリにて開催されたヴィクトリア女王の誕生日を祝うグランド・レビューで軍楽隊が引き起こした大失態であった。

トルコ、フランス両軍の参謀幕僚を交えて執り行われたこの式典で、イギリス軍の全軍楽隊が集結させられた。そして、彼らが国歌を演奏しはじめたまさにそのとき、事件は起こった。参加した人びとの耳には美しい音

色が聴こえてくるはずが、あるうことか、ばらばらで不協和音としか考えられないメロディーが聞こえてきたのである。原因は、イギリスの軍楽隊が、各楽隊それぞれ独自に編曲した調号の異なる楽譜を現場に持ち込み、それに気づかないまま一斉に演奏してしまったことにあった。²¹ これによって、イギリスは、一挙に自国の軍楽隊が統一性に欠け、役に立たないのだということを露呈してしまったのだ。²²

この出来事に対してケンブリッジ公が痛切に感じたこと　それが、イギリスの軍楽隊の編制方法に難あり、ということだったのである。²³ 彼のこの認識の背景には、イギリス軍楽隊の歴史そのものが抱える問題が存在したと思われる。以下、クリミア戦争に参戦する直前までのイギリス軍楽隊がたどった歴史を追いながら、当時イギリス社会で軍楽隊がおかれていた状況を概観してみたい。

イギリスにおける軍楽隊は、そもそもオスマン・トルコとの戦争に起源があるとされる。²⁴ 1529年、トルコ軍によるウィーン包囲を受けたヨーロッパ諸国軍はトルコの近衛兵イエニチェリの軍楽隊を目撃し、初めて耳にする彼らの音楽を「トルコの脅威」の象徴として恐れおののいた。²⁵ これを契機に軍隊における音楽の重要性を認識したヨーロッパ諸国では、コーヒーや絨毯などいわゆる「トルコ趣味」の流行に便乗したかたちで、トルコ軍楽隊のヨーロッパ版が次々と結成されていくことになる。換言すれば、ヨーロッパにおける軍楽隊の設立は、ヨーロッパから自発的に出現したのではなく、イスラム世界の影響を大いに受けた近世の戦争が動機となっていたのである。

しかし、従来から「音楽のない国」と言われてきたイギリスは、軍楽の世界においてもやはり「消費国」にすぎなかった。こうした流行のなかでは例外的に、軍楽隊を設立することに熱心ではなかったのである。1678年、チャールズ2世がかつての亡命先フランスを模倣して軍楽隊を結成させたものの、その隊員の大多数がヨーロッパからやってきたお雇い外国人やアフリカ、西インド諸島から連れてこられた黒人たちであった。²⁶ そして、彼らは各部隊の指揮官の私的所有物とみなされ、楽隊の維持に必要な諸経費などはそれぞれ士官たちの自己負担に委ねられた。²⁷ これによって、さらに軍楽隊の結成に対する消極的な姿勢が増長されたのである。

さらには、こうした社会で、軍楽隊が「専門職」視されることはなかった。たとえば1803年、軍隊の副大将であったハリー・カルヴァート (Harry Calvert, 1763?-1826)が各部隊の司令官に宛てた手紙のなかで「兵士が音楽家として行動することは許可しない」²⁸ と命令を下したという記録が物語るとおり、「軍楽隊員は音楽家ではなく第一に兵士である」²⁹ と考えられてきた。それゆえに、軍事史家 R・ホームズが指摘するように、18世紀末、戦地へ同行した軍楽隊はたいていの場合、担架兵として、あるいはさらに極端な例としてはときおり歩兵として活動せざるを得ない状況におかれていたのである。³⁰ そして、近世の軍楽隊設立から19世紀半ばにいたるまでずっと、これが伝統として受け継がれ、軍隊における音楽の重要性を認識することがなかったのであった。³¹

イギリスにおける軍楽学校史をまとめた G・ターナーは、こうした考えがはびこっていたがゆえに、軍楽隊を十分に確保するのは困難であり、軍楽隊を率いる指導者たちの多くが軍隊世界から離れる傾向にあったと分析している。³² おそらく、ケンブリッジ公が指揮官を務める第十七槍騎兵連隊の軍楽隊長であったドイツ人、ヘンリ・シャレーン (Henry Schallehn, 1815-91)もこうした「離脱組」のひとりだったのだろう。1845年から現職に就いていた彼は、クリミア戦争勃発直後、当然のことながら軍楽隊を率いて戦地へ赴くよう打診された。それにもかかわらず、すぐさまそれを拒否し、その後、軍隊とは関係のないクリスタルパレスで指揮者としての道を選択したのである。³³

こうした背景のもと、軍楽隊の指導者を欠いたまま戦地へ乗り込み、軍楽隊の重要性を認知したケンブリッジ公は、1856年、総司令官に就任した。そして、彼は直ちにある決断を下した。それこそ、この欠陥だらけの軍楽隊の改革だったのである。生涯、軍隊における改革をあまり望まなかったと記憶される彼が、改革に踏み切ったのだ。ケンブリッジ公は、すべての連隊に軍楽講座を設立すること、そして軍楽隊の設立に必要な楽器購入資金や修理代、楽譜の印刷代などの諸経費は陸軍省が負担し、もはや、お雇い外国人ではなくイギリス人の楽隊員を「専門職」として養成させねばならないことを提案した。³⁴ そのひとつが、翌1857年、ロンドン南西部トゥイッケナムに創設されたネラーホール軍楽学校 (Military School of Music,

Kneller Hall)というかたちに結実したといえよう。

ケンブリッジ公の功によって、すなわち19世紀も半ばを過ぎてようやく、イギリスの軍楽隊に統一性とそれなりの質が揃うことになった。³⁵ その後、軍楽隊をとりまく伝統として、時の君主の公式誕生日を祝う軍旗分列行進式(Trooping the Colours)が創造されたのは、軍楽隊改革のひとつの結果であるといえるだろう。現在、軍旗分列行進式が「古き伝統」としてまことしやかに語られていることを指摘したメディア学者の R・ギディングズは、この儀式をこう説明する。いわく、18世紀半ば、君主が王室御用邸に滞在する期間には日ごとに閲兵の儀式がおこなわれていたが、年一度、君主の誕生日に軍旗分列という形式を用いて行進をはじめたのは、19世紀初頭になってからのことである。しかも、毎年必ずしも挙行されたわけではなく、年中行事となるのはおおよそ1880年代のこと。この時期になってようやく、衣装が日々の軍務で使用する通常軍服ではなく正装に規格化され、軍楽隊による音楽とともに、君主の生誕の日が儀式として演出されていったのである。³⁶ まさに19世紀も終わりに近づくころ、軍楽学校の発展とともに、音楽の儀式化がはじまった。その端緒を開いたのが、イギリスのクリミア戦争参戦であった。それゆえに、クリミア戦争とは、戦争(軍隊)における音楽のあり方を变化させた戦争であったと結論づけても過言ではないだろう。

このことと、同時期に初のベルヴュー・プラスバンド・コンテストが開催されたこと　その意味はどのように考えればいいのか。

4. 競争、そして戦争の魅力　　プラスバンド運動の進展と軍楽隊改革のはざままで

軍楽隊の世界が大きな転換のときを迎えようとしていたちょうど同じ時期、ベルヴュー・コンテストの開催を契機として、各地でコンテストの開催が拡大し、プラスバンド運動は一気に加速しはじめた。そこに、コンテストで審査員を務める軍楽隊員たちのすがたがあったことは、すでに述べたとおりである。それゆえに、次に問わねばならないことは、軍楽隊員の周辺で彼ら自身の音楽が大きく変化しつつあったという事実が、プラスバ

ンド運動にとってどのような刺激となったのか、であろう。

従来の研究では、軍楽隊とブラスバンドにかんする二つの動きは別々のコンテキストで語られてきた。³⁷ それは、主として両者の楽器編成を問題視してきたからであろうと思われる。しかし、音楽をめぐるこの二つの動きがイギリスのクリミア戦争参戦の前後、同時期に起こったことを考えれば、両者のあいだに境界線を引いて区別するのではなく、むしろ両者の関係を「戦争、音楽、社会」という枠組みのなかで考える必要があるだろう。

その際、看過できないことが二つある。まずは1853年、ベルヴュー動物園で開催された第一回コンテストによって、「ブラスバンドの楽しみ方」が大きく変化したことである。それまで、公園や浜辺などで野外演奏し、その音楽に耳を傾けるほかなかったブラスバンドのあり方が、第一回ベルヴュー・コンテストの開催を機に、競争原理を用いた「音楽を競う娯楽」へとかたちを変え、それをひな型とするブラスバンド運動がこれ以降、拡大していったのだ。³⁸ もうひとつは、この第一回ベルヴュー・コンテストがブラスバンド史上初のコンテストではなかったという事実である。実際にこれ以前にもコンテスト自体は開催されており、たとえば1845年、ハルにほど近い片田舎パートン・コンスタブルで地元のジェントルマン、サー・クリフォード・コンスタブルがコンテストを開催したという記録が残っている。

にもかかわらず、なぜ1853年のベルヴュー・コンテストが、それ以後のブラスバンド運動に「競う」ことをひな型として提供しえたのか。その理由は、明らかにベルヴューの連続性にある。1853年以前のコンテストはどれも単発的に開催されたものであり、1845年のコンテストもその後、継続しておこなわれることはなかった。それとは対照的に、ベルヴュー・コンテストは、1853年以降毎年開催されており、この連続性ゆえに、そしてこの延長線上にブラスバンド運動の発展、さらには黄金期が訪れたと言ってもいいだろう。さらに問題は、なぜこれが1853年だったのかである。おそらくこれは、世界初の万国博覧会が開催された1851年におこなわれた人口調査で、都市人口が農村人口を初めて上回り、都市化が加速したことと無関係ではあるまい。社会の中心が農村から都市へと移り変わり、そこに暮らす人びとの生活も変化しつつあった。そして、そこで人びとはそれまで感じることのなかった音楽に対する「競争の魅力」を感じ始めたのである。

これは、先述したとおり、1845年、ハルのいなか町でコンテストが開催された際には芽生えていなかった「魅力」なのであろう。ブラスバンドは、都市の娯楽として、この時代に都市空間のなかで再編されたのである。

しかしながら、ブラスバンドに加えられた「競争の魅力」は、単に「都市化」によってのみ説明しうるものではない。それは、軍楽隊の改革に着手する契機ともなったクリミア戦争に対するイギリス社会の前代未聞の関心を抜きにしては考えられない。たとえば、この戦争で「ランプをもつ天使」として、時の人となったナイチンゲールの功績とアメリカ南北戦争における医療体制を関連づけて分析したアメリカ史家スーザン＝メアリ・グラントは次のように述べている。「クリミア戦争[の火ぶた]は……大衆の大熱狂ぶりが激増するなかで切られた」⁴⁰ 人びとは「ロシアの専制政治を蔑視し、道すがら[参戦の]スローガンを叫び、愛国的な唄を歌う」⁴¹ さらに、娯楽空間ではクリミア戦争の戦闘をドラマ化した一大スペクタクルが人気を博し、『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』をはじめ各紙が連日のようにその戦争の動向を大々的に伝えた。⁴² そして、国民が戦争にエキサイトするこの様を、ヴィクトリア女王は「信じられないほど大衆にうけた戦争」⁴³ だと表現しているのである。

このように、まさに国民の視線がクリミア戦争の動向に釘付けになっていたその時代に、「競争の魅力」を携えてブラスバンド運動は進展していったのであり、また、国民の熱狂があったがゆえに、戦地で失敗を繰り返した軍楽隊に対して、ラッセルはじめ従軍記者たちの非難が集中したのである。いうなれば、1850年代に起こったこの音楽をめぐる変化　軍楽隊の改革とコンテストを推進力とするブラスバンド運動　は、クリミア戦争という戦いのもつ「大衆性」と密接に結びついていた。グラントのことはを借りれば、「もはや戦争そのものが単なる軍隊の問題としては考えられなくなり、良かれ悪しかれ、国民の問題になる契機をもたらしたのがクリミア戦争という戦争だった」⁴⁴ のである。そして、軍隊のみならず、民間人を広く興奮の渦に巻き込んだこの戦争とその余韻のなかで、ブラスバンド運動もまた発展の糸口を見つけ、1890年代の黄金期へと加速していったのである。

5. むすびにかえて

労働者の娯楽として人気が沸きつつあったブラスバンドは、1853年、ベルヴュー・コンテストが開催されたことを契機に、「単なる」娯楽から「競争の魅力」を備えた都市の娯楽へと大きく変化した。そして、このブラスバンド運動がコンテストと密接に結びついたゆえに、審査員として常にかかわっていた軍楽隊員たちも、彼ら自身の音楽に改善が求められ、変化を遂げたのがこの時代であった。

労働者の「競争の娯楽」へと新たなかたちを見せ始めたブラスバンドとそのブーム、そして「専門職」の地位を新たに獲得し、戦地へとむかう軍楽隊 同時並行的に起こったこの両者の転換期は、国民がクリミア戦争に沸いた時代であった。そこから明らかなことは、1850年代を生きる人びとの音楽に対する見方がそれ以前とは変化しつつあったこと、とりわけ彼らが「戦争と音楽」の関係の変化を感じていたことであろう。この延長線上に、先にも引用したスーザン＝メアリ・グラントが主張するように、19世紀半ば、ちょうどこの時期に生じた「戦争と社会」の関係性の変化もまた認められるのである。⁴⁵

ここに注目すべき事実がある。それは、1853年に開催されて以来、1981年までずっと継続しておこなわれてきたベルヴュー・コンテストが、その歴史上、世界大戦中を含めてたった一度、1859年に開催されなかったことである。すなわち、コンテストにはひとつだけ、それでも確実に空白期があったことになる。従来、これは、参加希望者の激減と一般的に説明されてきたが、ではなぜこの年のみの人気がなかったのだろうか。

それを考える上で、さらにはクリミア戦争を経た社会のなかで進展しつづけるブラスバンド運動と軍楽隊の伝統形成の関係性を考え直すという意味でも着目すべき現象がある。それは、その翌年から、それ以前にはほとんど存在しなかった軍楽隊を想像させる名称をもつ団体のコンテストへの参加が急増していることである。たとえば、デュズベリ・ライフル兵団バンドやベイカップ第四ランカシア・ライフル義勇兵バンド、ハリファックス第四ウェストヨークシア・ライフル義勇兵バンド、ロビンフッド・ライフル・バンド、クレイクロス第三ダーピシア・ライフル義勇兵バンド、マト

ロック義勇兵バンド　このように「ライフル隊」や「兵団」、「義勇兵」といったことばが、ブラスバンド団体の名称として頻出するようになるのである。⁴⁶ 特筆すべきは、これらの団体が1860年代に新たに結成されたバンドではなかったということ、言い換えるならば、1859年を機に彼らがそれ以前に用いていた名称が續々と改称されたことである。かつて、デュズベリ・ライフル兵団バンドはデュズベリ・バンドとしてコンテストに出場していたし、ハリファックス第四ウェストヨークシア・ライフル義勇兵バンドはハリファックス・バンド、第三五ライフル義勇兵バンドはW・L・マリナーズ・バンドという名称を用いていた。⁴⁷

1859年以降に軍隊を連想させる団体が増えた背景に何があったのか。それはコンテストが開催されなかったことと、どう関係しているのか。ブラスバンド運動と軍隊の名前をもつバンド、そしてそこから想像しうる戦争は、19世紀半ば以降のイギリス社会でどう絡み合うのか。次にこの問題を考えながら、「武器のかわりに楽器を持ちはじめた労働者」像への考察をさらに深めていきたい。

註

本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第4回全国大会（2004年11月20日、於甲南大学）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

- 1 *Brass Band News*, November 1889.
- 2 Edward Salmon, 'How Brass Bands Are Made', *Strand Magazine: an illustrated monthly*, November 1894, 546.
- 3 「ブラスバンド運動」ということばは、もうすでに1860年7月11日、クリスタルパレスでのブラスバンド・コンテスト開催について報告した『タイムズ』の記事のなかで用いられている。*Times*, 11 July 1860.
- 4 1853年に開催された第一回ベルヴュー・コンテスト、ならびにブラスバンド運動におけるその意味などの詳細については、拙稿「1853年、第1回ベルヴュー・ブラスバンド・コンテスト」『甲南大学紀要 文学編135』、2005年、119-32を参照されたい。
- 5 *Brass Band News*, November 1904.
- 6 Jeffrey Richard, *Imperialism and Music: Britain 1876-1953*, Manchester UP, 2001, 434-38. そのほかのブラスバンド運動の先行研究については、以下を参照されたい。J. F. Russell & J. H. Elliot, *The Brass Band Movement*, J. M. Dent, 1936; Arthur Taylor, *Brass Bands*, Granada, 1979; Dave Russell, *Popular Music in*

- England, 1840-1914, Manchester UP, 1987; Roy Newsome, *Brass Roots: A Hundreds Years of Brass Bands and Their Music*, Ashgate, 1998(2002); Trevor Herbert (ed), *The British Brass Band: A Musical and Social History*, Oxford UP, 2000.
- 7 *Brass Band News*, December 1904, January, February, April 1905.
 - 8 *Manchester Guardian*, 10 September 1853.
 - 9 *Manchester Guardian*, 6 September 1854.
 - 10 Newsome, *op. cit.*, 49.
 - 11 *Times*, 11 July 1860.
 - 12 Russell, *op. cit.*, 164; Trevor Herbert, 'Victorian Brass Bands: Class, Taste, and Space', Matless Leyshon *et al* (eds.), *The Place of Music*, Guilford Press, 1998, 111-13.
 - 13 *Times*, 28 October 1854.
 - 14 *Ibid.*
 - 15 *Times*, 20 October 1854.
 - 16 *Times*, 26 April 1855.
 - 17 *Illustrated London News*, 3 March 1855.
 - 18 Gordon Turner & Alwyn W. Turner, *The Trumpets will Sound: the Story of the Royal Military School of Music, Kneller Hall*, Parapress, 1996, 15.
 - 19 *Ibid.*, 14.
 - 20 *Ibid.*, 14; *Dictionary of National Biography*, s. v. 'Duke of Cambridge'; G. R. Searle, *A New England? Peace and War 1886-1918*, Oxford UP, 2004, 254; A. N. Wilson, *The Victorians*, Hutchinson, 2002, 358.
 - 21 この当時、音楽の式典を催す際、事前にリハーサルをするという習慣があまりなかったようである。一例として、キャナダインによると、ウェストミンスター寺院やセント・ポール大聖堂の聖歌隊ですら王室儀式に際してリハーサルをしていなかった。David Cannadine, 'The Context, Performance and Meaning of Ritual: The British Monarchy and the "Invention of Tradition", c. 1820-1977', Eric Hobsbawm & Terence Ranger (eds.), *The Invention of Tradition*, Cambridge UP, 1983, 114.
 - 22 Turner & Turner, *op. cit.*, 14-15; Robert Giddings, 'Delisive Seduction: Pride, Pomp, Circumstance and Military Music', John M. MacKenzie(ed), *Popular Imperialism and the Military, 1850-1950*, Manchester UP, 1992, 43; Richards, *op. cit.*, 413. この一大事件について『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』(1854年6月17日)は単に「楽隊が国歌を演奏した」と記載、この時期にはまだラッセルは現場に到着していないため『タイムズ』には報告が見当たらない。
 - 23 Turner & Turner, *op. cit.*, 19.
 - 24 Giddings, *op. cit.*, 39-40; Richards, *op. cit.*, 412などを参照。管・打楽器の組み合わせはローマ帝国時代から存在するとも考えられている。阿部勘一『 brassバンドの社会史 軍楽隊から歌伴へ』青弓社、2001年、59。
 - 25 Eve R. Meyer, 'Turquerie and Eighteenth-Century Music', *Eighteenth-Century Studies*, vol. 7, 1973, 474; 新井政美「トルコ行進曲とトルコ軍楽」『みすず』第43巻4号、2001年4月、2。
 - 26 トルコの軍楽隊にいた黒人を模倣したと思われる。黒人たちにはドラムやシンバルといった打楽器を担当させ、ドイツ人やイタリア人など白人が着用す

- る服装とは異なり、頭にはターバンを、そして靴の代わりにサンダルを着用させるのが当時の流行だった。Giddings, *op. cit.*, 40; Richards, *op. cit.*, 412.
- 27 Herbert, 'Nineteenth-Century Bands: Making a Movement', Herbert (ed.) *op. cit.*, 15, 36; James Eli (ed. in chief), *Encyclopedia of the Victorian Era vol. 3*, Grolier Academic Reference, 2004, s. v. 'military band'.
- 28 Herbert, 'Nineteenth-Century Bands: Making a Movement', Herbert (ed.), *op. cit.*, 15.
- 29 Turner & Turner, *op. cit.*, 17.
- 30 Richard Holmes, *Redcoat*, Harper Collins, 2002, 124.
- 31 ラッセルが大絶賛したフランスでは、1792年に軍楽学校が設立され、またクリミア戦争直前の1852年には『軍楽隊の統一化 (*Organisation of Military Bands*)』なる教則本が出版され、軍楽隊養成の強化に努めていた。Turner & Turner, *op. cit.*, 15.
- 32 *Ibid.*, 17-18.
- 33 *Ibid.*, 17. シャレーンの人生についてはあまり明かされていないが、彼は1854年、クリスタルパレスの指揮者となったものの数ヶ月で解雇され、軍楽学校創設後には教師として再び軍隊の世界へと復帰した。Michael Musgrave, *The Musical Life of the Crystal Palace*, Cambridge UP, 1995, 67-68, 248. また、1860年にはクリスタルパレスで開催されたブラスバンド・コンテストに審査員のひとりとして参加している。Times, 11 July 1860.
- 34 Turner & Turner, *op. cit.*, 20; Percy A. Scholes, *The Mirror of Music, 1844-1944: A Century of Musical Life in Britain as reflected in the page of the Musical Times*, Novello & Company Ltd. and Oxford UP, 1947, 498-99. 具体的には、各連隊が出資金5ポンドおよび基金として年間8ポンドを支払えば、楽器購入資金500~600ポンド、そのほか諸経費1,000ポンドを負担すると提案している。
- 35 本論では紙面の都合上、軍楽学校でどのような音楽教育が実施されたのかについては割愛せざるを得なかったが、1859年から3年間ここで教育を受けた学生が残した証言から、かなり音楽漬けの学生生活を送っていたことを付記しておきたい。Turner & Turner, *op. cit.*, 24-25.
- 36 Giddings, *op. cit.*, 30-34.
- 37 たとえば、Herbert, 'Introduction', Herbert(ed.) *op. cit.*, 3; Giddings, *op. cit.*, 35-42; Richards, *op. cit.*, p. 411-16, 434-46;. などを参照されたい。
- 38 拙稿、130-31。
- 39 Enderby Jackson, 'Origin and Promotion of Brass Band Contests', *Musical Opinion and Music Trade Review*, 1896 (serialised).
- 40 Susan-Mary Grant, 'New Light On the Lady With the Lamp', *History Today*, September 2002, 13.
- 41 Michael Paris, *Warrior Nation: Images of War in British Popular Culture, 1850-2000*, Reaktion Books, 2000, 32.
- 42 *Ibid.*, 33-35.
- 43 Grant, *op. cit.*, 13; Paris, *op. cit.*, 32.
- 44 Grant, *op. cit.*, 17.
- 45 Paris, *op. cit.*, 11-17.
- 46 "List of Prize Winners, Brass Band Contests, held at Belle Vue Gardens, Manchester, September Contests, 1853-1925", Chetham's Library, Manchester, Jennison

Collection (F. 4.4)

- 47 Herbert, 'Nineteenth-Century Bands: Making a Movement', Herbert (ed), *op.cit.*, 38.

(甲南大学大学院博士課程)

When the Newcome children, including the two main characters, Clive and Ethel, travel on the Rhine, they are guided by Mr. Kuhn, an efficient German family servant. They enjoy very pleasant journey in Mr. Kuhn's care. From this episode we learn that allowing children's spontaneity leads to their happiness. This is the exact antithesis of the unhappy marriages between Clive and Rose, and Barnes and Clara, which their parents arranged, regardless of their wishes.

In the early 1850s when the novel was being published in installments, German refugees, Mr. and Mrs. Ronge, introduced the concept of the Kindergarten, which promotes the valuing and cultivating of the spontaneity of children, to a receptive middle class in Britain. This is also important to our understanding of the German scene above.

The story ends with the narrator's "[y]ou may settle your fable-land in your own fashion. Any thing you like happens in fable-land." It is inferred from these words that "fable-land" suggests the condition of the tour party in the German scene where children are permitted to behave as they like, which offers an invaluable lesson which corresponds with the principle of Kindergarten in allowing children's spontaneity.

Urging the Military Bands Reformation and the Brass Band Movement

Maki UEMIYA

The brass band movement became a striking phenomenon in Victorian Britain accompanied with the expansion of contests, originated and promoted with the first Belle Vue Contest, Manchester, in 1853. It is, therefore, naturally considered that the adjudicators (military bandmasters) had been one of the crucial factors for the historical analysis of the movement, despite the fact that the proceeding studies on the brass band movement had completely failed to contemplate them. For understanding the significance of the movement, more attention must be paid to

them.

Unveiling the surroundings of adjudicators in those days, hence the state of military bandmen, leads the exposure that the reformation of their disgraceful music had been contemporarily urged to themselves as the result of Crimean War (1854-56). The explications of the root causes offered, the followings are discussed: how their innovation was affected and related with the drastic expansion of the brass band movement; and what social impact there was felt in that respect.

Considering the two contemporary musical movements in parallel, it can be concluded that the nature of “popularity of Crimean War” inspired enthusiasm for brass band movement along with revealing the shifting view of music. This brings further a new light to the fact that the relationship between war and music was rearranged in the mid-Victorian period.

Jane Eyre and the Female Mission

Manami Tamura

Jane Eyre was written in the period when popular conduct books for middle-class women discussed the so-called ‘female mission’. This is also the period when the foreign mission began to be taken seriously during the evangelical movement in the Church of England. In this context, Jane’s life can be seen as a journey in search of her own mission. First, at Thornfield, her wish to serve her master takes on unfortunate turn and she barely escapes. Then, at Marsh End, she is offered another choice of mission by her cleric cousin St. John Rivers. It is the mission of spreading the Gospel in India. The fact that Jane does not accept it does not mean that she disapproves of the foreign mission itself. The problem for her is that she has to get married to St. John in order to be sent on the mission. St. John does not love her, nor does she love him. Furthermore, Jane thinks that his notion of mission lacks love as its basis, while, in her view, the most important basis of any mission should be love. In the end, she finds her mission in the married life with